

第3章 青葉山周辺地区の位置づけと方向性

本章では、青葉山公園を中心としその周辺である青葉山、広瀬川流域、中心市街地のエリアをひとつの地域としてとらえ、これを「青葉山周辺地区」としてその位置づけと方向性を検討する。

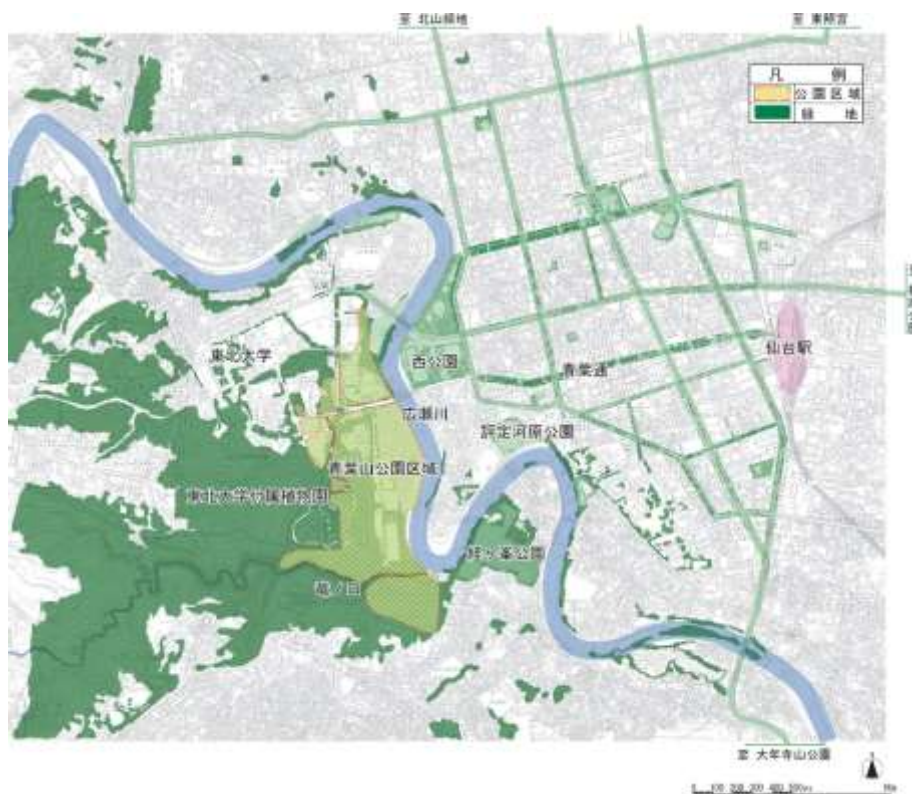


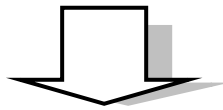
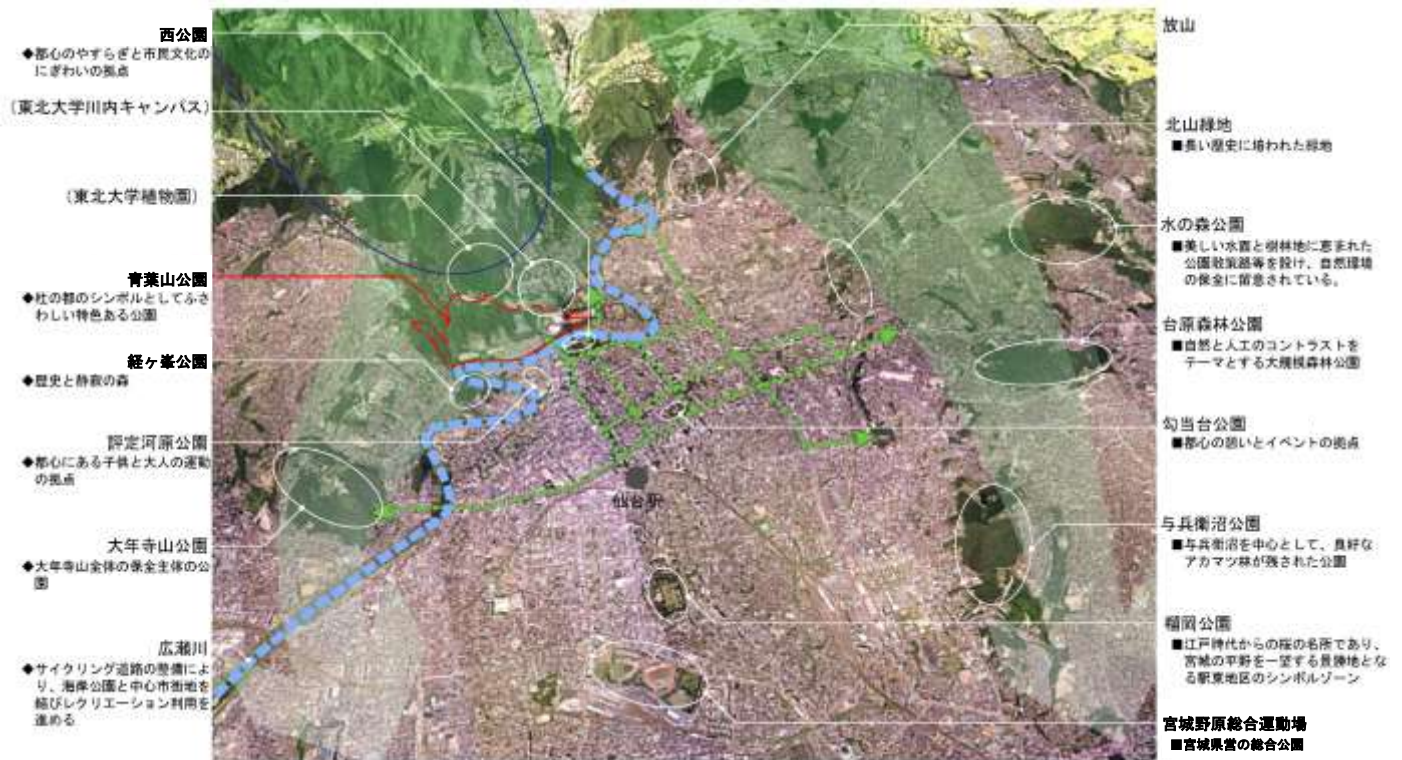
図 3-1 青葉山周辺地区のエリア

3-1. 広域的な緑の骨格形成から見た位置づけ

ここでは青葉山周辺地区の自然環境とその役割を明確に把握するため、仙台駅東側を含む広域的視点で捉えた仙台市域の緑は、幾重かの緑の環の骨格で形成され、これを貫くように青葉山方面からの丘陵地が市街地に伸びている。これに配置される緑の拠点は、基盤となる自然の資質によってその性格も異なり、多様な存在効用※1や利用効用※2を有する。青葉山周辺地区の緑は、中心市街地を取り囲む平坦な里山的丘陵地の緑や、市街地内の施設や緑地とは明らかに異なる自然的資質を有するとともに、加えて仙台城跡の貴重な歴史的資質を基盤に立地している。広域的な視点から捉えた仙台の緑の骨格形成をまとめると、青葉山公園は以下のように位置づけられる。

※1 積極的に利用せず、存在し将来へその姿を継承することでその価値が発揮される緑。手つかずの自然や深い緑など。

※2 市民が利用するための緑。芝生広場や散策空間など。



[緑の骨格形成から考えられる
青葉山公園の位置づけ]

①**緑の肺**：青葉山公園は緑の環（環状緑地軸）・緑の手・緑の回廊の結節点に位置し、青葉山公園とその後背地の緑のかたまりは中心市街地へ冷涼な空気を送り込む「緑の肺」として捉えられ、青葉山公園は中心市街地に広がる緑の回廊とを結ぶ役割が求められる。

②**シンボル景観**：青葉山公園とその後背地の緑のかたまりは中心市街地に隣接し、平坦な市街地から急激に立ち上がる緑の壁は本市を特徴づける景観要素であり、歴史的資質の高い青葉山公園は其中でもシンボリックな景観要素となるものである。

③**自然とのふれあい拠点**：青葉山公園とその後背地の緑のかたまりは奥羽山脈から連続する自然性の高い緑の手の一部を構成しており、結節点としての青葉山公園はこれら自然とのふれあいにおける導入部としての役割が求められる。

図 3-2 広域的な緑の骨格形成

3-2. 青葉山周辺地区の緑の役割と位置づけ

青葉山周辺地区は、広瀬川を軸とした特徴的な資質を有し、豊かな緑の拠点がそれぞれのエリアで役割を担っている。中心市街地を含めた青葉山周辺地区を、大きく以下の3つのエリアに分けてそれぞれの役割と位置づけをまとめる。

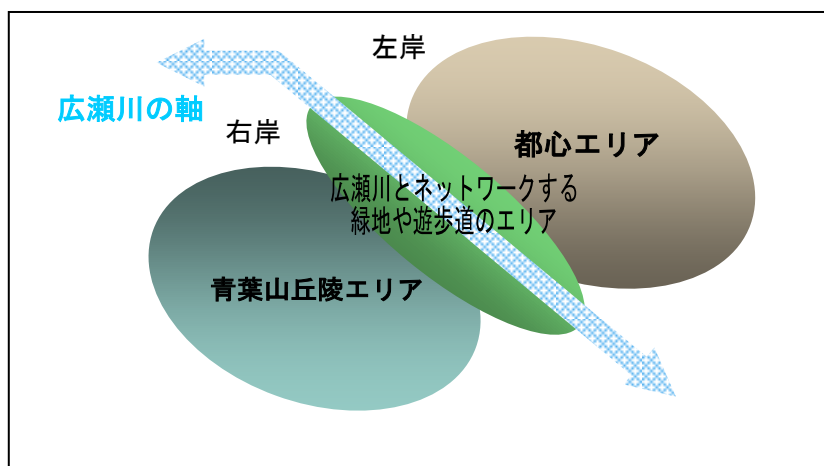


図 3-3 青葉山周辺地区のエリア分け

青葉山周辺地区に存在する緑地を市域レベルで見ると、青葉山に続く青葉山丘陵が大きな緑の保全の核となっている。この緑の塊は市街地に張り出した半島的な形状を呈し、その裾野に流れる広瀬川を軸に上流から青葉の森緑地、広瀬川牛越緑地などの河川公園、西公園、青葉山公園、経ヶ峯公園、評定河原公園などが連続した緑を呈している。

これらの区域のうち、青葉山周辺地区の緑地として以下の6箇所を杜の都の「緑の拠点」として位置づけ、3つの大きなエリアと共にそれぞれの役割を明確にする。

1) 広瀬川の軸（上流，中流，下流）

- ・都市気候の緩和機能を有し、風のみち（市街地への風の通り道）として機能する。
- ・右岸，左岸に展開する緑地，施設，遊歩道が広瀬川のネットワークによって連携する。

（1）広瀬川：市民と行政の協働で取り組みが進む豊かな自然と清流

大きく蛇行して市街地西部を流れる清流と沿岸の河岸段丘に代表される豊かな自然を伴う都市河川。青葉山と中心市街地を分け、仙台を代表する水と緑の軸。

2) 都心エリア

- ・都心を巡る緑の回廊と西公園，評定河原公園，広瀬川が連携して市街地に潤いのある緑と日常的なレクリエーション拠点を提供する。

（1）西公園（総合公園 10.8ha）：中心市街地に立地し古くから市民に親しまれる総合公園

広瀬川の左岸，中心市街地側に位置する日常的で多様なレクリエーションニーズに答える総合公園。都市環境と公園の緑の共生をめざし，都市の貴重なオープンスペー

スを活用した市民参加のイベント・スポーツ・休息利用の他、新しい文化の創造・防災機能など複合的な機能を持つ。

(2) 評定河原公園（近隣公園 1.7ha）：広瀬川に隣接する都心エリアのオープンスペース

広瀬川沿いのオープンスペースを活用した、市民スポーツの利用に特化した拠点であり、青葉山公園・経ヶ峯公園と対面することから、青葉山公園とのアクセスや利用の連携が期待される。

3) 青葉山丘陵エリア

・市域に大きく張り出す自然の最前線であり、都市環境の保全緑地機能（市街地への冷涼な大気ににじみ出しを促進する緑の肺）を有する。

(1) 経ヶ峯公園（歴史公園 6.5ha）：歴史と静寂の森

伊達家の霊廟として、仙台城跡との歴史的関連性が深いエリアであり、青葉山公園内の仙台城本丸跡から愛宕山へと向かう歴史軸上に立地する。青葉山公園（城跡）との歴史的・景観上の連携や広瀬川沿いの特色ある自然環境の構成要素として重要な拠点となる。

(2) 東北大学植物園：手つかずの貴重な自然の保全と活用のエリア

奥羽山脈からつながる深い自然が市街地に近接する緑の最前線であり、青葉山公園の緑の背景となるエリア。藩政期から手つかずの自然が残されており、竜ノ口の自然とともに自然度の高い貴重な緑地空間を有する。

(3) 青葉山公園（総合公園 50.3ha）：杜の都のシンボリックな役割を担う公園

国史跡の仙台城跡を含む歴史文化と、青葉山や広瀬川と連携する豊かな自然環境を有する杜の都のシンボル公園。対岸の西公園とは異なり、公園が立地する場の歴史資源、自然資源の保全活用に特化した公園。

3-3. 青葉山周辺地区の方向づけ

1) 計画の対象領域となる「景域」

青葉山周辺地区は、広瀬川の河岸段丘によって特色ある地形と景観を呈する。

青葉山公園の周辺では、広瀬川が大きく湾曲して自然の摂理で形成された崖面や河川敷が、青葉山公園とその周辺地区を景観的にまとめる一つの領域として特徴づけている。

本計画では、この領域を青葉山公園の立地する仙台固有の景観領域（景域）として捉え、青葉山公園計画を検討するうえで不可欠な領域として位置づけるものとする。

青葉山公園計画の検討領域

青葉山周辺地区は、大きく蛇行する広瀬川が造りだす自然的要素を中心に、青葉山の自然と歴史を基盤とした以下の景観領域（景域）を対象とする。

仲の瀬橋下の広瀬川緑地 → 仙台国際センターと対岸の西公園沿岸部 → 追廻の平坦地
→ 花壇の平坦地 → 経ヶ峯に至る広瀬川沿いの領域

いずれも背後の崖面や斜面緑地をかかえ、これらの緑に囲まれた空間が一体的に連なる景域を構成する。特に追廻から経ヶ峯に至る広瀬川の蛇行は、青葉山の深い緑と崖面を背負い、仙台城跡の歴史的景観と合わせて地区を特色づける景域を構成している。

青葉山周辺地区は、仙台発祥の地としての固有の歴史や文化・自然・風景資源によって成立しているため、公園計画ではこの貴重な資源が一体的に存在している「景域」を有効に活用した公園づくりを基本とする。

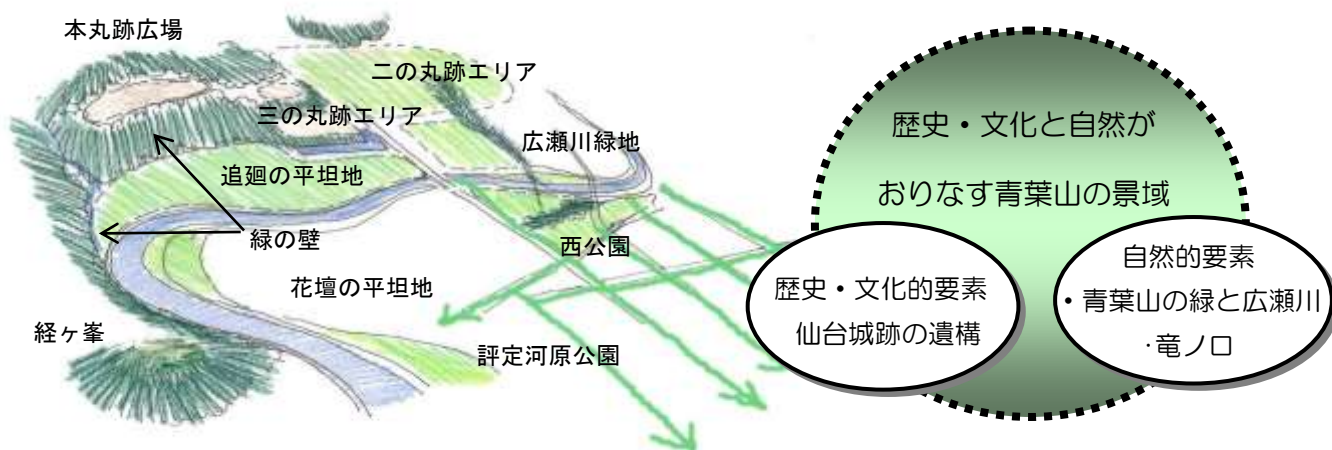


図 3-4 景域の概念図

2) 青葉山周辺地区の景観的方向づけ



図 3-5 青葉山周辺地区の景観的方向づけ

3) 緑の性格とあり方

青葉山周辺地区内に広がる緑は、市街地に近接した貴重な緑であるほか、奥羽山脈から続く市街地に張り出した緑の塊として位置づけられる。

青葉山周辺地区全体における緑の方向性としては、この緑の連続性を保ち、自然環境の保全を図るとともに、これを核として緑のネットワークを活用した中心市街地への派生をめざすことにある。

しかし西端は深い緑、東端は市街地中心部に位置するという違いがあり、藩政期から現在に至るまでの街なみや利用のされ方など歴史的文化的背景にも温度差がある。よって今後の緑のあり方においてもこれらの状況を踏まえ後世に継承していく必要がある。

広瀬川という軸を挟み、青葉山側と市街地側では、歴史性や市民生活、緑のあり方に以下のような違いが認められる。また広瀬川と青葉山に挟まれた区域は両区域の緩衝帯として緑を整備すべきエリアとして方向づける。

表 3-1 緑の性格とあり方

	歴史性・文化性	緑の性格性	効用の狙い	対象とすべき時代性
広瀬川左岸(広瀬川から中心市街地方向)	町民文化の賑わい	宅内の庭園や街路樹など人の手により生まれ育まれた緑 親しみやすい身近な緑	利用効用	その時代に求められる緑
広瀬川右岸(広瀬川から青葉山方向)	武家文化の威厳と静寂さ	近づき難い深い緑 人の手が入りにくい自然の緑	存在効用	その地域の遺伝子を後世に伝える緑

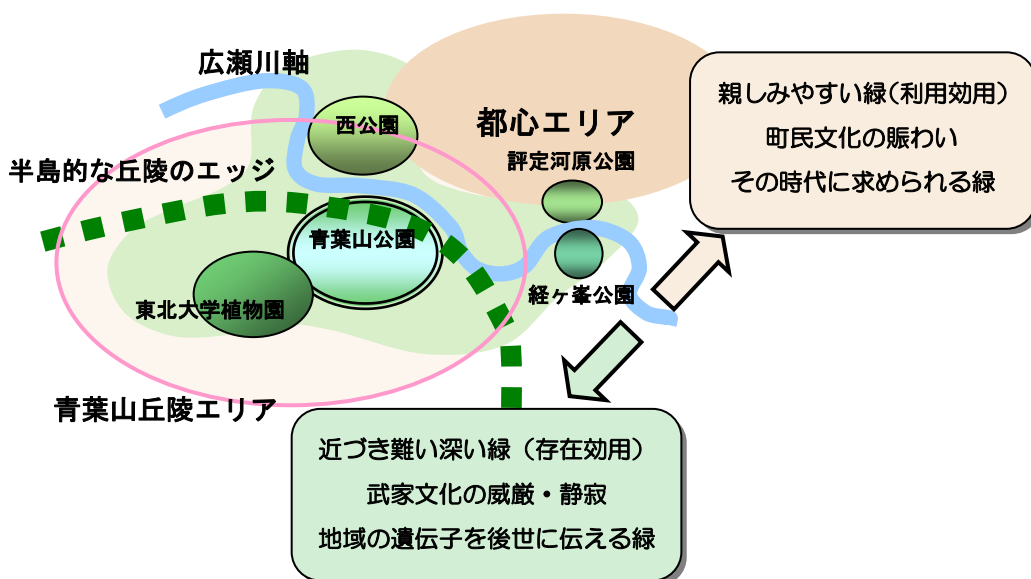


図 3-6 青葉山周辺地区の緑のあり方

4) 長期的な効果の波及性

青葉山周辺地区は、西公園から追廻・竜ノ口・経ヶ峯にいたる広瀬川沿い一帯について、「水と緑の美しい風景」と「仙台発祥の歴史文化が香る空間」の展開をめざす。

広瀬川沿いはもともと景観的に優れた地区であるが、さらなる動線整備が求められる。青葉山公園や西公園の整備と共に景観的に優れた地区として活力が生まれ長期的に中心部と結びつく波及性が期待できる。

(1) 活力の波及性

- ①青葉山公園・西公園の整備により市民や観光客などが訪れ、新たな賑わいが生まれる。
- ②新しい魅力的な店や施設などができ始め、対岸を含めた広瀬川沿い一帯に人々が集まり、賑わいと活力が生まれ波及する。
- ③中心市街地と広瀬川沿いの間に人の流れ（動線）が生まれ、広瀬川沿い一帯と中心市街地と結ぶ通り（緑の回廊）によってその活力が中心市街地へと波及する。

(2) 緑の波及性

青葉山周辺地区の各公園の整備により深い自然からの冷涼な空気や生態系が、次第に中心市街地へ波及していく長期的な効果が期待できる。公園内の緑だけに止まらず、緑が連担し、より多くの動植物の生息範囲が中心部へと広がっていく事が想定される。

- ①青葉山公園・西公園の整備により、まとまった緑空間が創出される。
- ②広瀬川を挟み、一体化した水と緑の空間となり、生態系の活動範囲も左岸側（市街地側）へ移行する。
- ③緑の回廊を通じ、中心部へと波及する。

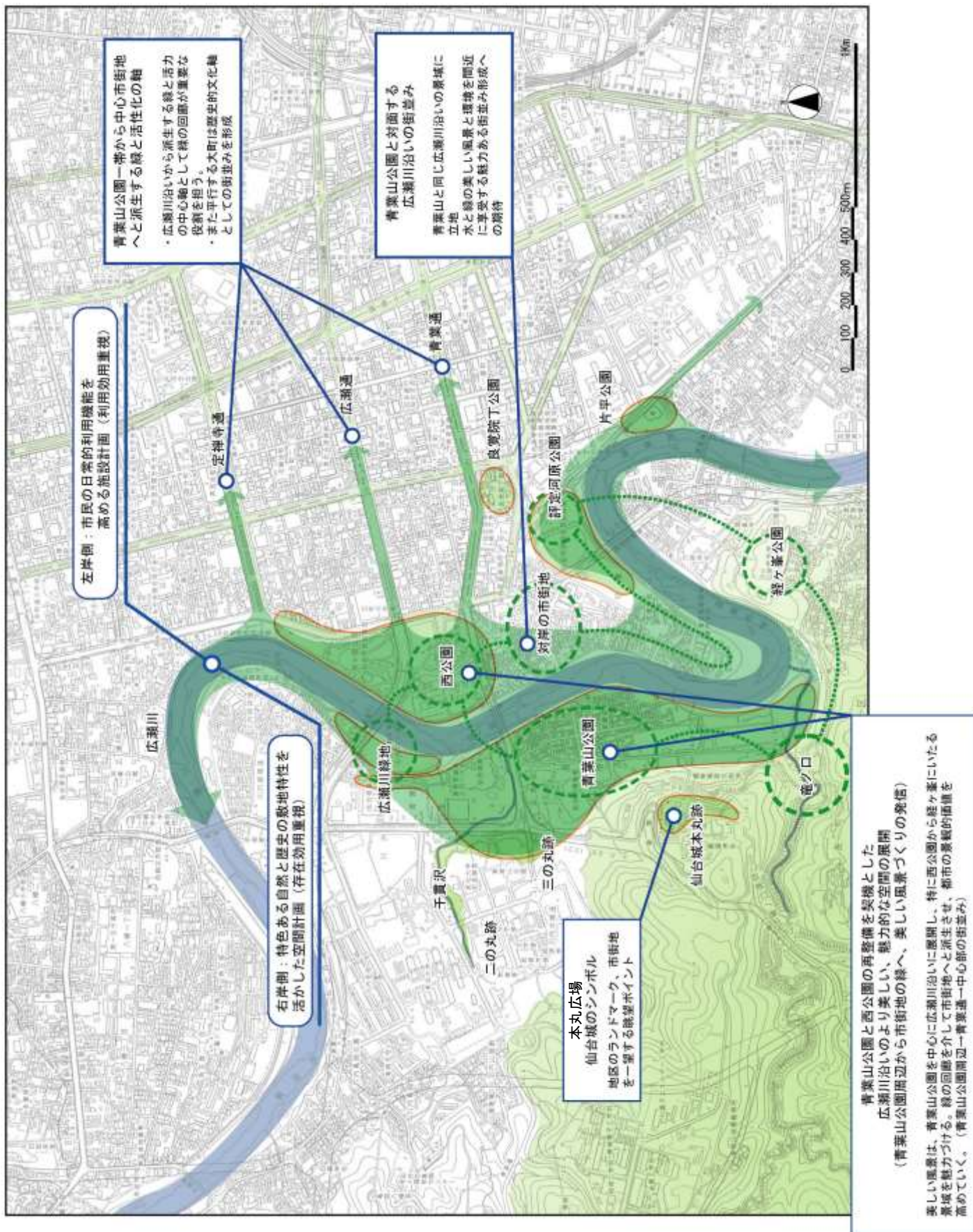


図3-7 活動ネットワークの基本的考え方

3-4. 青葉山公園の方向づけ

前段までの検討において、青葉山周辺地区内の各公園や緑地の性格や役割、整備の方向性について位置づけを行った。本段ではその位置づけから得られる青葉山公園の方向付けを行う。

青葉山公園は、仙台を代表する重要な資源を有する地域に立地し、青葉山周辺地区全体の戦略的計画の上に成立するため、計画にあたっては立地する場の広域的視点に立ち、青葉山周辺地区の「緑の拠点」それぞれの役割分担を明確にすることによって青葉山公園の計画を方向づけるとともに、これらのネットワークにより各拠点が連携しながらそれぞれの役割を担う事が出来るようにする。

- **西公園**は市民の日常的な利用を主体とした公園であり、中心市街地における緑の回廊と青葉山公園をネットワークさせる中継公園として位置づけられる。青葉山公園側の歴史や文化、手つかずの自然度の高い緑とは異なる性格の緑でありながら、広瀬川を挟んでひと塊の緑とする事で、都市緑化を創出する緑としての役割を担う。
- **広瀬川**沿いに分布する西公園、青葉山公園、経ヶ峯公園、評定河原公園など主要なレクリエーション拠点を遊歩道や自転車道などによってネットワークさせ利用の連携を図る中で、最も面積が大きく川に接する距離が長い青葉山公園はレクリエーションの発信基地として、また連携利用の中核を成す公園といえる。
- **経ヶ峯公園**は伊達家の霊廟がある閑静な公園として青葉山公園と精神的歴史的な繋がり軸を持ち、また広瀬川を軸とした歴史散策ルートの拠点や相互の景観眺望ポイントとして青葉山公園との連続化を図る。

青葉山公園

手を加えない自然と歴史性、周辺との連携を重んじた公園づくり

青葉山公園には仙台の象徴とも言うべき仙台城跡を中心に、
歴史的遺構や自然地形、豊かな緑が残されている。

青葉山周辺地区においては、青葉山公園を核とした緑のネットワークを形成し、
回遊する動線によって、それぞれの拠点の連携、役割分担を推進する。

たとえば、西公園や評定河原公園とは、川を渡るルートを設定し、
広瀬川を挟んで一体化をめざすことを将来の目標にする。

青葉山公園計画は、このように地域固有の資質を活かした
仙台唯一の公園をめざすものであり、

自然・歴史・文化・景観等、各種機能を総合的に有し、
青葉山周辺地区と連携しながら

「杜の都」のシンボリックな役割を担う公園として方向づけられる。

【周辺から見た青葉山公園計画の位置づけ】

広瀬川の流域で仙台市街と近接する仙台特有の景域に立地
 周辺には、重要な緑の拠点が存在し、それぞれが関連しながら固有の資質と役割を有する。



- 仙台を代表する景域の中心への立地と、豊かな自然環境・歴史文化の資質を活かした公園づくり。
- 市街地に接する緑の景観壁を保全・活用し、市街地と青葉山の緑の接続点として自然環境の存在効用を活かした公園づくり
- その自然地形を利用した史跡仙台城跡の歴史的資質を保全・活用した公園づくり
- 青葉山周辺地区の景域の中であって、自然と緑の拠点の中心となるシンボル性を活かした公園づくり。

【西公園】
 広瀬川対岸の日常の市民利用を主体とした公園であり性格を異にしながらも一体化した緑，利用連携を構築

【青葉通】
 大橋に至る景観的な軸線であり、並木の生育環境の将来を見据えた緑陰道路として歩行者動線の拡充を図る

【経ヶ峯】
 青葉山公園と歴史的・景観的な軸を持ち、アクセスの連続化及び見る・見られる関係を構築

【青葉山の手つかずの自然】
 奥羽山脈と青葉山公園をつなげる深い自然であり生態系の多様化のため保全する



図 3-8 青葉山公園の方向づけ (1)

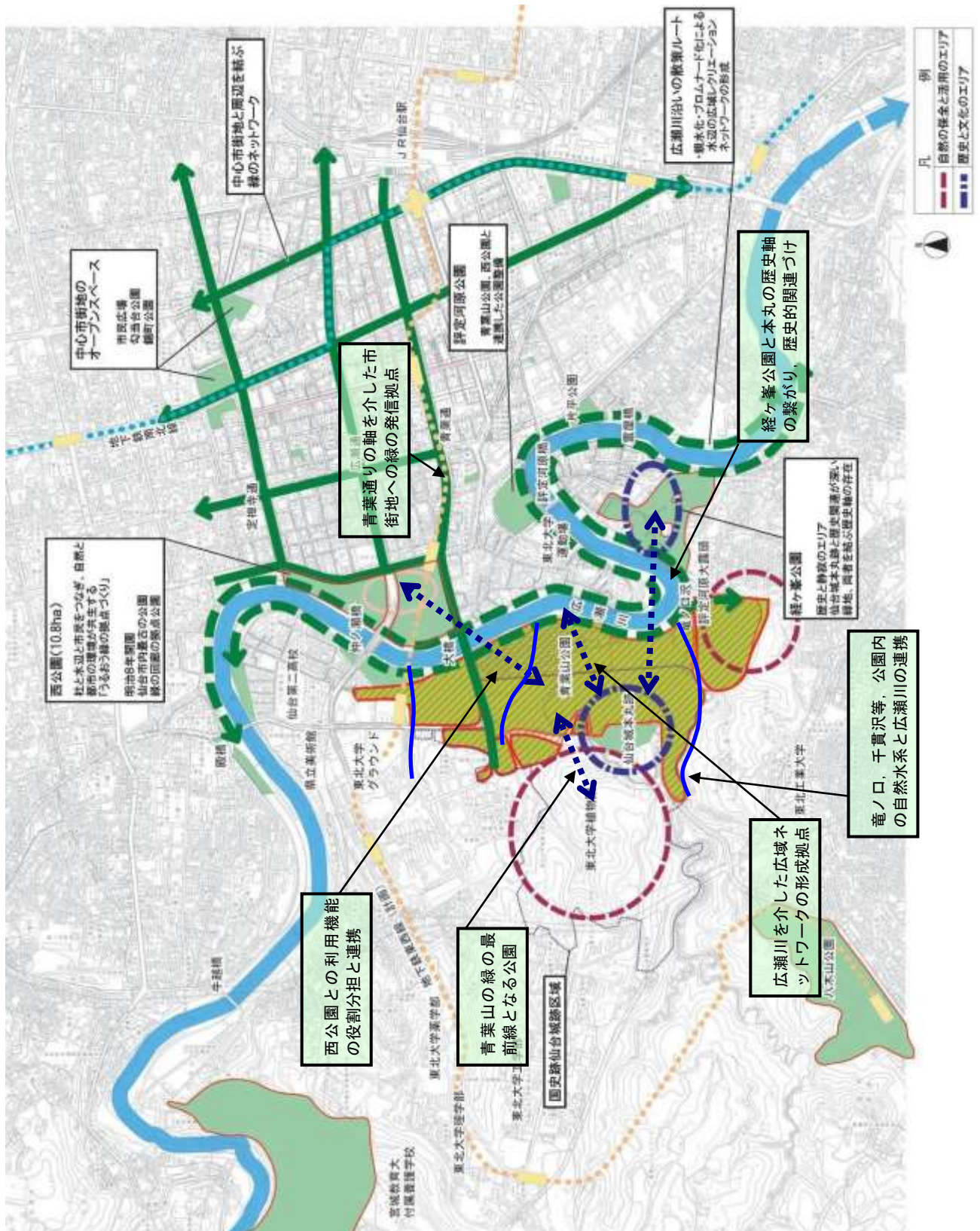


図3-9 青葉山公園の方向づけ(2)

施設等の配置と機能強化イメージ

- 国際センター駅周辺地区について、「新たな魅力を創造・発信する、杜の都 仙台のシンボルゾーンへ」という基本理念のもと、既存施設・資源の活用はもとより、新たな施設の整備・利活用、施設間のネットワーク、相互連携を図るとともに、この地区の歴史性や自然・景観と調和のとれた施設デザインに配慮しながら、地区全体として前記のような機能強化等を図っていく。



【(仮称) 国際センター周辺整備の基本的方向性より】